
天羅異聞

ボンクラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天羅異聞

【Nコード】

N0364I

【作者名】

ボンクラ

【あらすじ】

TRPGのキャラクターを作っているうちに眠くなっていき目を覚ますとそこは・・・。

第一話（前書き）

TS物です。 苦手な方はご注意ください。

第一話

「さて、これでキャラクターの作成はおわりっ」と

俺、佐倉一さくらいちめはそう言っ手てにしていたシャーペンシャーペンを机に転がした。俺はさっきまでTRPGのキャラクターを作っていたのだ。

TRPGというゲームについて詳しく語ることにしてはここでは省略させてもらおう。

ことの始まりは先週、友人が買ってきたあるTRPGをやろうという話になったことだ。これまでやってきたキャンペーンも終了したところで友人がおもむろにかばんの中から取り出したのがこのゲームだった。

俺としてはこれまで遊んできてかなり強くなってきたキャラクターに愛着も湧いてはいたので、少し抵抗もあったが特に反対する気にもならず来週までにキャラクターを作ってくることに同意した。

このゲームの世界観について平たく言うとな戦国時代をベースにしたもので、そこに陰陽師やよく分からない超科学などが混じったものである。

PCたちはそこでは基本的に皆、超人的な能力の持ち主であるらしい。

どうやら友人はすでにシナリオを考えていたらしく、作成するキャラクターについてある程度指示を受けている。

今回俺がやってくれと言われたキャラクターは傀儡くわいと言う種族だ。詳しくはまだキャラクター作成の部分しか読んでいないので分からない部分が多いが共感とか言うよく分からない能力値が全能力値中最高でなければならなかったり、いろいろないかにも戦闘系がとるようなスキルに制限があったりとなんとも貧弱そうだ。

(でもまあ、これならたぶんそう簡単に戦闘不能にはならないだろ)

俺は敏捷と共感が初期に作れる最大値であとは体力に多く割り振り戦闘時に使用するスキルばかりを習得したキャラクターを見てそ

う思った。

今回のGMは、傾向としてなるべく強く作っておかないとシナリオ途中でやられかねないのだ。（ゲームバランスをとるのが苦手と本人は言っているが）

そこで俺は回避や攻撃に関係する能力の敏捷、最大値にしなければならぬ共感、タフさに影響する体力の数値を重点的に割り振ったわけだ。

装備も決め世界観や詳しいルールについても読み進めるうち（ここで俺は傀儡が基本的に女キャラであることを知って設定の性別の部分を変えた）だんだん眠くなっていき意識を失った。

現在能力

体力	5	敏捷	10
感覚	2	知力	4
心力	4	共感	10
天下	4		

技能

白兵戦闘	上級	芸事	中級
枕事	中級	作法	中級
話術	初級	兵法：竜虎一天流	上級
法術	初級	回避	中級
事情通	初級	応急手当	中級
観察	初級	追跡	中級
運動	初級		

第一話（後書き）

天羅万象零というTRPGを舞台にしたものです。設定が間違っていたりすることもあると思いますがその点はなるべくスルーしてくれるとうれしいです。題名は途中で正式なものに変えると思います。

第二話

「イタツ」

俺は頭に何かをぶつけた痛みで目を覚ました。痛む頭を抑えるところにはなぜか長い髪がある。俺は別に髪を伸ばしていたわけではないのでそれを不審に思ったが周りを見るとそんな考えも一瞬で吹き飛んだ。

「どこだよ、ここ…」

俺はさっきまで山道のど真ん中で寝ていたようだ。山道といってもそこはコンクリートで舗装されているようなものではなく土の地面むき出しで周りにはうっそうと森が生い茂っている。今の詳しい時間は分からないが太陽の位置からして昼ごろなのだろう、今はそれなりに明るい。これが夜になったらどうなるか、少なくとも現代人である俺はこんなところで一晩明かしたくは無い。

次に自分の身にまわっているものに目があった。

「なんだこりゃ…」

俺はなぜか寝る前に着ていたシャツと半ズボンではなく、やけに豪華な着物を着ていた。俺の思い間違いでなければこれは十二単というようなものではなからうか。色は淡いピンク色で、俺は名前は知らないが何かの花のガラなのだろう、美しい色づけがなされていた。俺の目から見てそれはなんとなく高価な品物に見えた。

すそが長いため地面にこすれてしまっている。これでは動くはこの着物はあるという間に土で汚れてしまうだろう。自分の服を手で触って確認していると何か硬いものがあつた。

「マジで…」

それは刀だった。それも2本ある。

一つは途中でぼつきり折れているもの。鞘が無く刀身がむき出しで危ないことこの上ない。もう一つは刀になぜかリボルバー拳銃の輪胴のようなものが鐳のすぐ近くにくっついていてるものだ。も

ちろん俺はそんなものは持っていなかった。それらがなぜか帯の部分に差し込まれていたのだ

ついでに言えばさつきから声が妙に高い。俺はどうしたってこんな声は出ないはずだし、まして自然にしゃべるだけでこんな声になどなるはずがない。

「いったいどうなってるんだよ…」

だが俺が自分の置かれた状況に呆然としていることはできなかった。声からすると若いのだろう、女性の悲鳴と硬い金属どうしつぶつけたような音がいくつも聞こえてきたのだ。

俺はとにかくその声のするほうに行ってみることにした。普段の俺ならそんなことはしないだろうがそのときはまだ思考が停止してしまっていたのだろうか、好奇心の赴くままに駆け出していた。

途中着物のすそが邪魔になり両手ですそを抱えてなんともさまにまらない格好で走っていた。

(うつ…)

着いたそこは本物の鉄火場であった。道の真ん中では薄汚れたぼろい服をまとったいかにも山賊ですと言わんばかりの男4人と血だまりの中に伏せる男が一人、流れ出ている血の量が尋常ではない、なぜだかもう助からないと俺にはわかった。あとは4人、皆女性だ。年はぱつと見二十代後半が一人、二十前後が一人に十二歳ごろに見えるのが二人だ。彼女たちは一つに寄り添っておびえた目で男たちを見ている。

「あんだーこの姉ちゃんは？」

そう言つて男の一人が俺に気づいてこちらを見たとき俺は猛烈に後悔した。

「姉ちゃん、いい服着てんなー」

「へっへ、ここを通りたきや通行料をもらわねえとな」

「おい、この姉ちゃんには傷着けんじゃねえぞ。こんだけの別嬪だ、高く売れるぜ」

口々に男たちが勝手なことを言う。

「おら、おとなしくしろよ」

そう言って一人がこちらに刀を向けて近づいてきた。

俺は血のついた刀を向けられたことにたじろぎ、先ほどの男たちの言っていた姉ちゃんという言葉について考えをめぐらせることもできず一歩ずつ後ずさっていった。

しかし途中で単のすそに足を取られ、尻餅をついてしまった。

きつとそのとき俺はパニックに陥っていたのだろう折れた刀を手に取りむちゃくちゃに振り回したのだ。

それは運よく男の手首に当たり、そこから先をあっけなく切り飛ばした。

「うぎゃー」

「このクソアマ」

「おい、よせ」

右手の手首から先を切り飛ばされた男は血を噴出させながら地面をのた打ち回り、仲間がやられたことに頭に血が上ったのだろう、他の仲間の静止も聞かずに俺に別の男が切りかかってきた。その動きは俺にはとても緩慢でつたない動きに見えた。俺の体はまるでこれまで厳しい鍛錬でもしてきたかのように尻餅をついた状態から自然に体勢を整え、そいつのふところに素早く飛び込み、驚いた表情をした男がまだ刀を振り下ろす動作を行う前にそいつの首を右手に持った折れた刀であっさりと切断していた。

第三話

それからであつという間の出来事だつた。あまりのことに頭が働いていなかったのだろう、そのときはあまり正確には覚えていないが仲間がやられた事に激昂してあとの二人も襲い掛かってきたが、なにぶん身体能力・技量双方にあまりに隔絶した差があつた。俺はどこにも何も考えず、体が覚えているように左手でもう一本の刀を抜き、まるでスローモーションの映像みたいにゆっくり襲い掛かってきたそいつに左手に持つ奇妙な刀で一閃。男が防ごうとして刀を構えたが、刀と刀がぶつかる直前おれはその刀についていた引き金を引くと何かが破裂するような音がした。それと同時に相手の刀をまるでバターのごとく断ち切りそのまま相手の胸を横一線、斬り裂いた。もう一人は右手に持った折れた刀で相手の刀を打ち払うと、俺はコマのように回転して左手に持った刀を先ほど男を切り裂いた勢いのままに目の前の男にも斬りつけ、今度は首を切断した。

それらの一瞬の惨事を目にし手首を切り飛ばされ、先ほどから転げまわっていた男は悲鳴を上げて山中に消えていった。それを見て気が緩んだのだろう。精神的な疲労から俺はそこで意識を失った。

「あつ、気が付かれましたか」

俺が意識を取り戻したとき、俺は先頃の女に背おわれていた。どうやら先頃のことは夢ではなかったのだろう、現実逃避をしたくなってくるが自制心を働かせ、とりあえずおろしてもらった。

「ここは…」

「白込村に向かう途中の山道です。とりあえず近くの村で一度休憩を取ったほうがよいかと思ひまして。あつ、私の名前は奏とい

います。先ほどは危ないところを助けていただきありがとうございます」

そう言つて二十代後半に見える女が言つた。

先ほどは気にしている余裕も無かつたがぶつちやけその顔はかなり俺好みだ。色白の肌におっとりとした雰囲気を感じさせる少し下がった目じり、バランスの整つた顔になきボクロが年上が守備範囲の俺にはストライクだ。

俺はついさっきまでこの人におんぶされていたのかと思い、若干上ずつた声で自分も挨拶をした。

「俺は佐倉一つて言います。俺、重かつたでしように……」

「ふふつ。私こう見えても力には結構自信があるんです。それに十二単を着たままならともかくあなた自身はそんなに重くありませんよ」

テンパツていてさっきまでは気づかなかつたが服が変わつていた。さっきまで着ていたクソ重たい十二単は一番下の一枚だけになっていた。と、首を下に向けたとき、そこで俺はうつすら感じていた違和感の正体を知る羽目になった。

これまでは分厚い衣装に隠れて分かりにくかつたがそこには俺に有る筈の無いふくらみが有つた。しかも結構デカイ。目をこすつてみるが見間違いなどではない。

「ちょ、ちよつと待つてくれ」

俺は今度は別のことにテンパツてあわててそばの茂みの中に入っていく。それに奏さんはあらあらといった表情で、まだ名も知らない他の三人は少し不審げな目つきで見られたがそんなことにかまっていられる余裕は今の俺には無かつた。

草は結構な高さまで育っており、俺がこれから行う行動を隠すには十分だった。俺はそこですさまじくいやな予感に襲われながら前をはだけ、俺の又の付け根にあるはずのものを確認しようとした。禪を前から後ろに通してあったのでそれをはずそうとしたのだがあせっていたせいかな少し手間取ってしまったが、それを外すとそこには……。

「あつ、ちゃんとある……」

第四話

「つて、それはそれでどうよ…」

俺は見慣れたものが着いていることに安堵したのもつかの間そんなことを考えた。だってそうだろう。こんな中途半端な状態よりはいつそ女になりきってしまったっているほうがまだマシってものだ。だが、俺は気づかなきゃいいことに気づいちゃった。

「こ、こいつはいつたいどういうことだ…」

なんと、俺のナニの下に俺がこれまでエロ本でしかお目にかかったことの無かったものがあるのだ。

「勘弁してくれ…」

俺は軽く絶望した。両性具有とかどんだけマニアックだよ。そんな意味不明なことを考えているくらいには混乱していたのだが、頭を振つてとにかく落ち着くと今の状況をとりあえず整理してみることにした。

まずはお約束、頬をつねってみる。

「いっつてー」

めちやくちや痛かった。力の加減を思いっきり間違えてしまったみたいだ。というかそもそも俺にこんな力が出せるはずが無い。だが、今はそんなことはどうだっていい。頬が痛すぎる。俺があまりの痛みに悶絶していると、大丈夫ですかと声かけられ俺はあわてて大丈夫ですと返事をした。手を見ると血が付いている。

どうやら皮膚が切れてしまったらしい。痛みも落ち着いてきたところで俺は服を着なおして戻ることにした。これ以上不審な行動をとって彼女たちに変に思われるのは避けたい。もっとも帯はどう結べばいいのか分からなかったので適当に縛っただけで自分の目から見ても何か変な感じはしたが…。

「お待たせしました」

俺はそう言っただけで戻った。

「まあ、どうしたんですその怪我。ひどい傷」

奏さんは俺を見てそう言った。俺は適当に笑ってごまかすしかなかった。まさか自分でやった怪我ですとは言えず、また俺にはとっさにうまい言い訳は思いつかなかった。

その後、奏さんに傷の治療をしてもらいながら後の3人に自己紹介をされた。

見たところ二十前後の年齢と予想した女性の名前は鈴というらしい。俺は二十前後と予想していたが、16歳らしい。肩まで伸びた髪はつややかで目は大きくパツチリしていて愛嬌がある。そのくせどこかその瞳からは意志の強さを感じさせ、それが彼女を少し大人びた印象にしていたらしい。こうして見ればなかなかの美少女だ。

後も二人は要と明日香。双子だそうで髪型、衣服ともに同じ今の状態では持ち物でしかどちらが要か明日香なのかは俺にはまだ判別できない。年は俺の予想したとおりの十二歳でショートカットでその顔にはかすかにそばかすがある。なかなかかわいい。性格は二人とも大人しいようだ。

自己紹介を聞きながら俺は今の現状について整理してみることにした。怪我の治療の際に奏さんに、「女の子が顔に傷なんて作って…」などとお説教じみたことを言われたことから、俺はどうやら完全に別人になってしまっているらしいと考えた。なぜなら、もし以前の俺の顔が女の子に見えるようならその目は完全に腐っていると言い切れる。眼科なんて手遅れだろう。まあ奏さんが目が手遅れな人なら話は別だが…。

そして今いるのは何処だろうか？ 日本語が通じている以上日本のどこかだとは思うが…。俺は現在地について聞くことにした。鈴さんには少し不審な顔をされてしまったがかまってられない。返ってきた答えは南房州の来冠国だというものだった。少なくとも俺は聴いたことは無い。認めたくはないがこれはタイムスリップなのではないだろうか？ だがタイムスリップにしたってそんな国、歴史の授業で聞いたことは無い。だがこれがドッキリなどであるはずが無い。何せさっきの…

そこまで考えて俺は自分に絶句した。さっき俺は人をあんなにあつさりと殺しているのである。なのに俺はそれについてなんとも思っていないかったのだ。別に大したことではないと思っているのだ。たしかに向こうから手を出してきたことではあるがそれでも、それでももつと思えばいいのではないだろうか。それとも俺はそんなことを気にも留めないような社会不適合者だったのだろうか…。

そこまで考えたところで俺は彼女たちもさっきのことを気にしていないことに怖くなった。少なくとも今の状態から先刻に起きたことを想像するのは無理だ。何でさっきみたいなことがあったのにもうも平然としていられるのだろう。だがそんなこと聞けるわけも無く俺はこれらのことはとりあえず考えないことにした。

「ちょっと、ちゃんと聞いているの」

自分の考えに没頭しているのを見抜かれたのか、鈴ににらまれてしまった。

「ああ、ごめん。 ちょっとぼんやりしてて」

自分から鈴に話しかけたというのになんとも失礼なことをしてしまった。

鈴の話によると彼女たちは旅芸人であるらしい。 ちなみにあそこで殺されてしまった男は護衛として雇った傭兵だったらしい。 また、奏と鈴は医師でもあるらしくこれから大きな戦が起こりそうな来冠国で従軍医として同行し、あわよくそのまま仕官できればそこで4人とも定住したいと言っていた。

これまでも他の所で似たようなことをしてきたがやはり戦が終わればある程度の褒美をもらってそれでおしまいだったらしい。 従軍するのは怖くは無いのかと言ったらほとんど勝利の確定した戦にしか参加していないのだそうだ。 だから今まで敵のひとりも見ただけ、運ばれてきた負傷兵の治療を後方でしてきただけだったという。 それでも俺には勇気ある行動に思える。

また、驚いたことに要と明日香は奏さんの実の娘らしい。 旦那は誰だ。 ちくしょー。 件の要と明日香には警戒されてしまっているのかお母さんの後ろに隠れられてしまっている。 なんともそれも悲しい。 ちなみに鈴と奏さんは姉妹だそうだ。

俺は自分のことについて聞かれた時のためにいろいろ嘘を考えていたが、そのことには触れられなかったためほっとした。 わけありだろうと気を利かせてわざと聞かなかったのかもしれない。

そんなことを話しながら歩いているうちになんと粗末な家が見えてきた。

第四話（後書き）

タイトルを変更しました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0364i/>

天羅異聞

2010年10月10日21時38分発行